# Ⅰ　ハンドブックの概要

## （1）　子ども交流・体験活動推進事業の概要

### ア　経緯

**①現状**

・少子化や核家族化、都市化の進行
・子どもたちが異年齢や異世代の人間関係の中で活動する機会の減少
・仲間意識や年長者を敬う気持ち、他人を思いやる心、人間関係から生じた問題の解決能力の低下

↓

**②目的**

・子どもたちの人間関係を築く力（人間力）を育成するため

↓

**③ねらい**

・宿泊を伴う異年齢の子ども同士の交流・体験活動や異世代交流・体験活動などの機会の拡充をめざす
・地域の社会教育施設を活用し、人間力の育成をめざす

↓

**④手法**

・異年齢の集団で寝食をともにしながら様々な活動をする
・家庭や学校、自分が生活する地域や自分自身を見つめ直す機会を提供する

以上をふまえ、平成 18 年度より「子ども交流・体験活動推進事業」が展開された。

### イ　経過

平成 18 年度はモデル事業として愛知県教育委員会主催による夏合宿、冬合宿をそれぞれ愛知県美浜少年自然の家、岡崎の愛知県青年の家で行った。

翌年度からは地域の教育力の高まりや活性化を期待し、実施団体の公募を行った。その結果、平成 19 年度には瀬戸市、美和町、知立市、蒲郡市と(財)愛知県教育・スポーツ振興財団それぞれを中心とする実行委員会に事業を委託し、実施した。

各事業では愛知県青年講座などを修了し県内各地域の子どもたちの交流・体験活動をサポートする青年リーダーが事業の企画運営等に積極的にかかわることで、交流・体験活動の一層の効果を高めた。平成 20 年度も同様に事業が展開され、豊田市、知立市、幡豆町、蒲郡市、(財)愛知県教育・スポーツ振興財団の５つの委託先で事業が実施された。

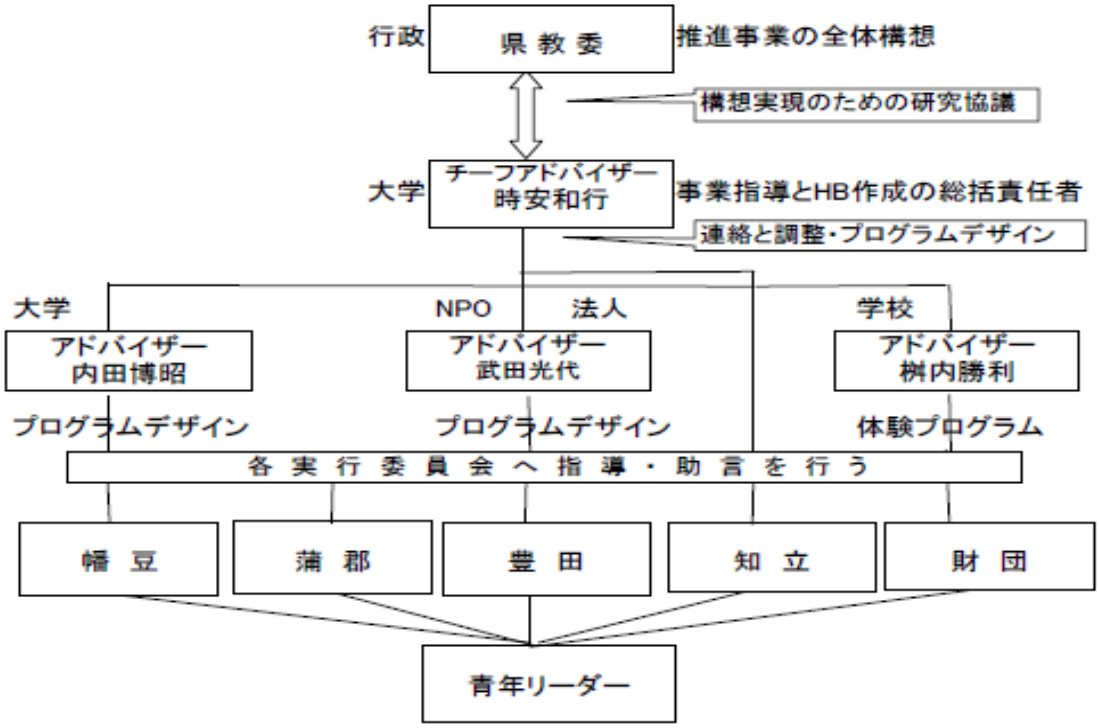
詳細については第Ⅶ章「３年間の子ども交流・体験活動推進事業のまとめ」で詳しく述べることとする。

### ウ　事業協力者名簿（敬称略　表１）

| 名　　称 | 実行委員会　・　所属 | 代表者・担当氏名 |
|---|---|---|
| チーフアドバイザー | 中京女子大学人文学部児童学科准教授 | 時安　和行 |
| アドバイザー | 東海市立名和中学校 | 桝内　勝利 |
| | 名古屋大学、岡崎女子短期大学非常勤講師 | 内田　博昭 |
| | 特定非営利活動法人アズワン専務理事 | 武田　光代 |
| 青年リーダー | NPO ふれ愛ねっ！to あいち代表理事 | 早川　喬俊 |
| (財)愛知県教育・スポーツ振興財団 | (財)愛知県教育・スポーツ振興財団 | 林　　良三 |
| | (財)愛知県教育・スポーツ振興財団 | 下野　直樹 |
| 蒲郡市 | 蒲郡子ども交流体験活動推進事業実行委員会 | 鈴木　清貴 |
| | 蒲郡市教育委員会生涯学習課 | 内田まり子 |
| | | 清水　　一 |
| 豊田市 | 豊田市青少年健全育成推進協議会 | 甲村　敬司 |
| | 豊田市子ども部次世代育成課 | 佐藤　英之 |
| 幡豆町 | ふるさとワクワク体験塾実行委員会 | 勝　　良一 |
| | 幡豆町教育委員会生涯学習課 | 山﨑　　豊 |
| | | 近藤亜由美 |
| 知立市 | チャレンジキャンプ実行委員会 | 沓名　基嗣 |
| | | 橋本　博司 |
| | 知立市教育委員会学校教育課 | 三浦　祥志 |
| 県教育委員会 | 生涯学習課社会教育推進グループ | 村瀬　正幸 |
| | | 織部　匡久 |
| | 生涯学習課振興・調整グループ | 石川　陽子 |

### エ　役割分担・組織

**図１　平成 20 年度　子ども交流・体験活動推進事業　企画運営組織図**



## （2） ハンドブック作成の趣旨

### ア ハンドブック作成の趣旨

このハンドブックは、３年にわたって実施された「子ども交流・体験活動推進事業」において、地域の豊かで多様な教育資源を生かし、異年齢・異世代との交流・体験活動を通して成長した子どもたちの姿と実施状況及び事業の成果を柱にまとめたものである。今後、市町村や関係団体で、子どもを対象とした交流・体験活動の実践を始める場合や、現在の取り組みをさらに発展させていくための助けになればと思い作成した。事業の企画運営の際、参考資料として活用していただければ幸いである。

### イ 事業の特長とねらいをふまえたハンドブック作成の目的

**特長① 異年齢・異世代の交流・体験活動よる人間力の育成**

・対象は小学生から高校生と異年齢の参加に幅を持たせている。

・宿泊を伴い、子どもたちが同じ屋根の下で、寝食をともにしながら交流する。

↓

**※ねらい…子どもたちに身に付けさせたい力**

「自立した一人の人間として生きていくための総合的な力」

・仲間意識・年長者を敬う気持ち・他人への思いやり・人間関係の中で生じた葛藤を解決する力・規範意識・協調性などの「人間関係を築く力」を重視し、それらを「人間力」として捉え、その育成を図る。

↓

**※手法**

・日常ではふれ合うことのない人々との交流のなかで、異なった価値観にふれる。

・自然とのふれあいや人と関わり合う交流・体験活動をする。

・自分自身や地域を見つめ直し、人としての共感の幅を広げる。

・豊かな人間性や社会性を培う。

**特長② 青年との協働による充実した交流・体験活動**

・事業の企画・運営・評価において青年リーダーが参画している。

↓

**※ねらい**

・青年の豊富な経験、ひたむきさ、情熱、子どもに対する共感的態度などそれぞれの思いや能力を存分に発揮することにより、交流・体験活動を実り豊かなものにする。

・子どもの体験活動では、若くて一定の経験のある指導者に指導される場合が、効果が最も高くなる。（文部科学省委託調査『長期自然体験活動が子どもの「生きる力」に及ぼす効果』平成 14 年）

**特長③　地域での青年指導者の育成**

・参加した高校生を、活動支援サポーター、青年リーダーへと育成し、地域の活動の核としていく。

↓

**※ねらい**

・「地域の青少年を地域で育てる」際、既存の青年指導者だけでなく、活動意欲のある青年を発掘し、彼らを青年指導者として育成する。

・事業に青年が参加し、楽しさややりがいを感じるところから、新たな指導者が登場し、地域の未来を担う青年指導者として成長していくことを期待する。

①②③の特長とねらいをより効果的に実践する指針としてハンドブックを作成した。

## （3）　ハンドブックの活用法

ハンドブックはできる限り活動の実践に資する形式を取った。実際の事例を柱に体験活動を様々な切り口から取り上げている。体験活動といっても実施する団体によって対象も目的も様々である。本節ではこのハンドブックを利用する団体やそれぞれのニーズに合わせた、効果的な活用法を紹介する。

下記のような担当者を想定してハンドブックを作成した。それぞれの組織・団体の実績や担当者の経験年数、地域的な差異などを考慮し、参照すべき章を示した。おおよそ想定される活動事例は紙面の許す限り、記載してある。必要に応じてアレンジしながら、独自の交流・体験活動を作り上げていただければ幸いである。

☆青少年活動担当者

・市町村の教育委員会、その他青少年部局等の行政担当者
・ＮＰＯ等各種団体の青少年指導者
・青少年活動を企画する社会教育施設の担当者
・学校教育の中で青少年活動を指導する担当者
・その他青少年活動に関係する事業の担当者

↓

☆知りたいこと・ニーズ

| | |
|---|---|
| ・これから交流・体験活動を始めたい。 | 第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅴ章・第Ⅷ章へ |
| ・交流・体験活動の考え方を知りたい。 | 第Ⅱ章・第Ⅶ章へ |
| ・今ある活動を、より効果的に発展させたい。 | 第Ⅳ章へ |
| ・様々な交流・体験活動の事例を知りたい。 | 第Ⅳ章へ |
| ・事業を実施する際の安全管理面を知りたい。 | 第Ⅴ章へ |
| ・事業実施後の評価の方法について知りたい。 | 第Ⅵ章へ |
| ・活動に利用できる施設を知りたい。 | 第Ⅷ章へ |